

氏 名	おくのまほりこ 奥野満里子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第116号
学位授与の日付	平成10年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科哲学(倫理学)専攻
学位論文題目	シジウィックと現代功利主義

(主査)

論文調査委員 教授 加藤尚武 助教授 水谷雅彦 教授 内井惣七

論文内容の要旨

シジウィック(1838-1900)は、現代英米倫理学の出発点に位置し、功利主義の方法論的な確立を追及して、ムーア以降現代にいたるまでの英米圏の倫理学研究の基盤を築いた人物である。彼の名著『倫理学の方法』を取り上げた論者の目的は二つ設定されている。一つは、シジウィックの錯綜した議論全体の綿密な分析であり、もう一つは、シジウィックが扱った問題がヘアなどの現代の論者によってどこまで解決されたかの検討である。論者の検討によれば、現代の倫理学者の種々の工夫にもかかわらず、功利主義のさまざまな問題点を追究する上で、シジウィックの分析はまだ重要性を失っておらず、現代の倫理学者たちが彼を乗り越えたわけではないという判断が示される。

本論文は、第一部「シジウィックの倫理学説」(序論, 1-8章)、第二部「現代功利主義の再検討」(9-12章, 結論章)から成り立っている。

序論, 第1章, 第2章では、倫理学一般の基本概念とシジウィックの論述の基本的な前提が示される。常識的な義務や徳の規則を扱うにあたり、公共に関わる仕方とされる個人の行為と純粋に私的な範囲内での個人の行為とを区別することには困難があるという理由で、シジウィックは常識的道德の検討から議論を始める。個人が自分の意志でなすべきことを決定する合理的な手続きとして、自らは功利主義を支持していたシジウィックは、利己主義, 功利主義, 教義的直観主義(義務論)という代表的な三つの方法について「中立の立場から、できる限り偏らずに説明し批判する」ととどめ、功利主義と利己主義との調停が不可能であると結論する。ひとつの方法を選択する前に、それぞれについて完全な知識をもつことが『倫理学の方法』の狙いだった。

第3章では、三つの方法の厳密な概念規定と、『究極的な理由』に基づく説明が与えられる。シジウィックは「神の意志」, 「自己実現・自己発展」, 「自然本性に従う」などの究極的な理由を吟味して、(1)「人間的な卓越と完成」, (2)「自分の幸福」, (3)「人々の幸福」, (4)「無条件に指令される義務」を広く妥当と認められているものと見なし、これらの分析から、利己主義, 功利主義, 教義的直観主義という三つの方法が導かれると述べている。論者は「自由の実現」, 「周囲の人間との協調」のような他の理由を考慮にいれても、これらは前述の究極的な理由に帰着するので、シジウィックの三つの方法は「同一の個人が日常的な道徳的思考において用いている思考様式」の類型として有効であるという。

第4章と第5章では、『倫理学の方法』全体の概要と、倫理学にとって基礎的な概念となる「理性」(reason)「べき」(ought)「正しい」(right)「善」(good)の分析が行われる。もっとも重要なのは「べき」(ought)の規定であるが、(1)事実概念からの区別、(2)単純で定義不能、(3)実行可能性を前提とする、(4)普遍化可能性、(5)手段の決定に関連する非道徳的用法との区別、というシジウィックの多面的な議論が整理されている。ヘアの普遍化可能性の概念はすでにシジウィックによっても提示されているが、両者には微妙で重要なズレがあることが指摘されている。

第6章では、シジウィックによって出された「自明でしかも意義のある命題」の五条件が、その歴史的背景と彼の哲学的直観主義の評価ともに分析される。すなわち、(1)明晰さ、(2)反省による確証、(3)無矛盾性、(4)一般的合意、および(5)同

語反復の回避、を基準として常識的徳の格率が吟味される。

第7章ではシジウィックの倫理学の中心的な枠組みとなる「正義」、「合理的自愛」、「合理的博愛」という三格率についての解釈と、前述の「正しい」「べき」「善」の概念分析との関連が指摘される。論者は、正義の格率を「ある行為が自分にとって正しいと判断するなら同様の状況の同様の人すべてにとっても正しいと判断する」、および「自分にとって正しく別の人にとって不正であると判断するなら二人の性質や状況の間に、二人が別人であるということ以外の何らかの違いがあるためではなくはならない」と分析して見せる。難点は「異なる個人であるという以外に同様でない」という内容をどのように確定するかにある。

合理的自愛の格率は、未来の私にとっての善を現在の私にとっての善と同じように尊重することを要求する。論者はこの格率が善の評価における時間的偏りの要求であると解釈し、量と確実性が同じであるなら時間によって善の評価を差別してはならないという指令であると分析し、この格率が他者の善の評価にも適用されることを論ずる。

合理的博愛の格率は、同一量と同一の確実さの善については、特定個人の善を他の個人の善よりも重視してはならず、特定善ではなく善一般を目指すべきであるから、自分の善と同様に他人の善を尊重することを命ずる。

この三つの格率の解釈についての論争点は、それら相互の関係である。

正義の格率では、類似した諸個人から構成される「論理的な全体」が想定されている。

合理的自愛の格率では、一連の意識状態からなる一個人の全体としての善が想定されている。合理的博愛の格率では、個々の人間存在もしくは感覚的存在の善をすべて集めて構成される全体としての善が想定されている。これについて、塩野谷祐一教授は「三つの公理の中に数学的全体論が共通して含まれている」という解釈を示した。

これに対して論者は、第一に、正義は「論理的全体」にかかわり、自愛と博愛は数学的・量的全体にかかわるという点にシジウィックの意図があったという解釈を示して、塩野谷教授の学説を論駁する。第二に、塩野谷教授が「自愛・博愛の原理は正義の原理を善の原理に適用することによって得られる」と解釈するのに対して、論者は正義と善（自愛・博愛）の間には、還元不可能な異質性が存在すると主張する。論者は、第三に、正義の原理における論理的全体では、量的な判断は無関係であるが、善（自愛・博愛）の原理の本質は量的関係にあると指摘する。

第8章では、功利主義のシジウィックによる基礎付けが要約される。1（帰結主義）、徳目や規則を自己目的的なものと解する非帰結主義では、不明確さ、例外、あるいは相互矛盾を避けられないので、体系的な倫理学は帰結主義でなければならない。2（最大化）、善の概念の分析的な真理として最大化原理は導かれうるが、それが博愛となるか自愛となるかは決定できない。3（快樂主義）、快樂とは主観的な望ましさによって測定される感情であり、一見、快樂に還元できないようにみえる善でも、十分に反省を加えるとその価値が快にあることが分かる。

以上のシジウィックの論点解析から、論者は、功利主義理論における、(1)直観主義の妥当性（第9章）、(2)快樂説と選好充足説（第10章）、(3)最大化の可能性（第11章）、(4)利己主義と普遍的功利主義の矛盾（第12章）という四つの問題の解決の方向を、シジウィック以降現代功利主義理論のなかに求め、シジウィックの理論との対比・対質を試みる。

第9章では、ヘアの倫理学がシジウィックの原理抜きでは成り立たないことを論ずる。ヘアは道徳判断には「普遍化可能な指令」という特質があり、道徳判断の確立には特別な直観は不要で、論理と事実判断だけで十分に道徳上の議論には決着がつくという。ヘアは他人の立場に立って他人の選好とその強さが分かった上で、複数の当事者の選好充足を最大にする行為が正しいという。しかし、シジウィックの自愛と博愛の原理を前提しなければこの結論には到達できない。

第10章では、シジウィックの快樂説とヘアの選好充足説を比較し、ヘアの議論のうちにシジウィックの快樂説の要素が不可欠であると論じられる。すなわち、快樂が感情として存在するのに対して、選好充足では満足という感情が欠落する可能性がある。ところが、「他人の立場に立つ」ことを重視するヘアの議論の説得力を支えているのは、単なる選好充足ではなく、選好が満たされる、あるいは満たされない時に主体が経験する感情を再現することである。言い換えれば、他人の立場を予測するとき、他人の選好ではなく他人の快・不快の予測が肝要である。これはシジウィックの快樂説の論点にほかならない。かくして、選好充足説を採用するにしてもいくつかの修正が必要になる。

第11章では、効用の総和の算出方法が論じられる。アローの一般可能性定理を参照したとき、三個以上の選択肢に対して、選好の強度を度外視して順位だけによる多数決方式で、意思決定しようとするれば、社会的な意思決定に必要な諸条件（たとえば独裁の排除）を完全に充たす決定方式は存在しない。この事態に対する解決案として、論者は選好の強度を何らかの共

通の尺度で測定し集計するというハルサーニの理論に注目する。ある個人が自己の評価スケールを個人間比較を通じて社会化する思考実験により「拡張された共感」を導き出すという構想である。アローも「拡張された共感」の可能性を認めている。しかし、(1)個人の選好を強さに応じて評価するというシジウィックあるいはヘアの原理から、(2)道徳的望ましさが選好強度の総和で測られるという総和最大化原理が出てくるのかどうか、論者は結論を留保している。

第12章と結論章で、論者は、功利主義と利己主義との対立可能性というシジウィックの論点に対して、パーフィットによる人格同一性の再考によって自他の区別を超える可能性、およびブランドの両刀論法による合理的選択として功利主義を正当化するという議論を検討している。

論文審査の結果の要旨

功利主義の倫理思想は、ベンサムによって唱道され、ミルによって修正・普及を見たのであるが、英米世界でのアカデミクな理論展開としては、シジウィック（1838-1900）の『倫理学の方法』（1874年初版、1907年7版）との絶えざる理論的な応答関係のなかで形成されてきた。しかし、我が国では明治31（1898）年に翻訳が出たものの、功利主義の研究が新カント派の隆盛の影に隠れてしまって以降は、塩野谷祐一教授、行安茂教授の業績を除くと、本格的なシジウィック研究と言えるものはほとんどなかった。

シジウィックの著『倫理学の方法』は、しかし、一見してその基本概念がどのように構成されているか判断がつくという教科書的な意味で良くできた書物ではない。読者はしばしば悠々として行く先の知れぬ散歩道に同行させられたかのように、道筋を見失う。この豊かで、かつ方法論的に見てさまざまな手法が隠された書物との長い対話の跡が、現代英米の倫理学であると言っても言い過ぎではない。

シジウィック『倫理学の方法』を、そのような対話の軌跡もろとも再現し、現代倫理学の方法論的な主題を浮き彫りにし、シジウィック思想の現代的な位相と同時に現代英米倫理学のシジウィック学としての姿を明らかにしたのが、本論文である。

シジウィックの論述から論者は、功利主義理論における、1. 直観主義の妥当性、2. 快樂説と選好充足説との関係、3. 総和最大化原理の可能性、4. 利己主義と普遍的功利主義の矛盾という四つの構造的な問題を取り出した。

1. 現代において、ヘアの倫理学がシジウィックの直観主義を超えて、論理と事実判断だけで功利主義理論を構築したとされるが、しかし、その理論が成立するためにはシジウィックの自愛と博愛の原理が不可欠であることを論者は明らかにしている。

2. シジウィックの快樂説とヘアの選好充足説を比較し、選好充足説を採用するにしてもシジウィックの快樂説の原理を再現するような、いくつかの修正が必要になることを明らかにした。

3. 効用の総和最大化原理の導出方法について、論者は選好の強度を何らかの共通の尺度で測定し集計するというハルサーニの理論によって難点からの脱却を図るが、この難問の本質はシジウィックによって明確に把握されていたことを明らかにした。

4. 論者は、功利主義と利己主義とが理論的にはどちらも成立可能で、ときには両者の与える指針が矛盾するというシジウィックの論点に対して、パーフィットの理論によって自他の区別を超える可能性、ブランドの両刀論法による合理的選択として功利主義を選ぶという論点をより妥当な方向に展開しようとしている。

叙述に未整理な点があること、また、中心となる論点について、倫理学的な議論だけでなく経済学や政治学での取り扱いにも触れる、という配慮が足りないことなど、まだ論文として改善の余地はあるが、20世紀の功利主義論を構造的に明らかにしつつ、シジウィックの歴史的な文献の内容を解明したことは、我が国の倫理学研究に大いに寄与するものであると評価することができる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成10年7月9日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。